

男子大学生の大学生活への適応に関する研究 —対人関係の困り感と適応感、自尊感情との関連—

A Study of Adjustment to University Life for male students:
Relationship between difficulties and subjective adjustment, self-esteem.

八 木 成 和
Shigekazu YAGI

男女による適応への対人関係の影響の仕方の違いや発達障害の出現比率に男女差があること、また、女子大学生だけを対象とした研究はこれまでもみられるが、男子大学生のみを対象とした研究は見られないことから、本研究では、男子大学生392名を対象に対人関係の困り感と適応感、自尊感情との関連について検討し、現代的な課題を考察することを目的とした。

分析の結果、自閉症スペクトラム障害的困り感尺度から「集団活動の困難さ」「想像力の困難さ」「友人関係の困難さ」「感覚面の困難さ」の4因子を抽出した。そして、青年用適応感の5つの因子と自尊感情尺度との間で相関係数を算出した結果、負の相関関係が見られた。男子大学生において、対人関係面は困難さを感じる要因であり、適応感や自尊感情に影響することが示された。これは、その後の支援内容の性差にも関連する問題であることが示唆された。

キーワード：男子大学生、困り感、適応感、自尊感情

1. 問題と目的

2004年に発達障害者支援法が制定され、「発達障害」は、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるもの」と定義された。そして、大学は、「大学及び高等専門学校は、発達障害者の障害の状態に応じ、適切な教育上の配慮をするものとする。」とされている。一方で、高等学校までは特別支援教育が導入され、大学への接続も検討される必要が出てきた。

これまで八木・広瀬・楠本（2011）において大学における発達障害及びその疑いのある学生への支援と自立支援の方向性について検討し、支援モデルの提案を行った。そして、八木・楠本・広瀬・川下（2012）において発達障害あるいはその疑いのある要支援大学生への実態調査および支援体制について検討した。

八木他（2012）では、大学生268名を対象とし、岩淵・高橋（2011）による大学生のADHD困り感尺度（49項目）、山本・高橋（2009）による自閉症スペクトラム障害的困り感尺度大学生版（AS困り感尺度）（25項目）、調査対象大学における学習面に関する困り感の調査項目（20

項目)によって質問紙調査を実施した。岩淵・高橋(2011)も山本・高橋(2009)も大学における支援ニーズを把握するために日常生活における大学生の困り感を測定することを目的としているため使用した。その結果、ADHD困り感尺度の項目において、とても困っていると感じている学生が多いことが示されたことに比べて、自閉症スペクトラム障害的困り感尺度と学習面の困り感の項目では、とても困っていると感じている学生が相対的に少ないことが示された。

発達障害に関わる困り感は大学生活への不適応に大きく影響するものである。高等学校段階まで発達障害の問題がなくとも、大学入学後に学習面、生活面、就職活動などの側面で課題を抱えることが指摘されている(楠本・八木・広瀬, 2010)。

これまでに青年期の不適応については古くから議論されてきた。竹端・佐瀬(2015)はこれまでの大学生の不適応に関する研究を概観し、学力面、進路、抑うつ等の大学生が抱える問題を指摘している。そして、不適応という概念自体が多くの要素を含んでいることを指摘し、その要素として、対人関係、心身の健康面、行動面を挙げ、加えて、大学生の不適応を示す特徴的な概念として過剰適応を挙げている。

以上のように、大学生の不適応は多くの要素を含んでおり、研究で取り上げられる観点も異なっている。そのような中、不適応を適応感という観点から検討してきた研究が見られる。大久保(2005)は、「適応本来の意味である個人と環境との関係の視点」から適応感の尺度を作成する必要性を述べ、青年期適応感尺度を作成し、「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」「劣等感の無さ」の4因子を見出している。そして、大学1年生を対象に4月と10月の2時点間の適応感について検討し、入学当初の4月よりも夏休み後の10月の方が、適応感が高くなることを示している(大久保・青柳, 2005)。

また、心理的欲求尺度を作成し、関係性への欲求、自律性への欲求、コンピテンスへの欲求の3因子を抽出し、青年期の適応感との関連について検討している(大久保・加藤, 2005)。そして、心理的欲求尺度の3つの因子の得点と環境からの対応する領域の要請得点との差から不一致得点を算出した上で適応感について検討した結果、個人と環境の適合性から適応について考えることの必要性を指摘している。

近年では、適応感を大学生活の様々な要因との関連から検討されることが多く見られる。特に、対人関係は多くの研究で取り上げられている。大学生の親子関係に焦点を当てたものとしては、堂野(2015a)が見られる。堂野(2015a)は、女子大学生を対象に大久保(2005)の青年用適応感尺度を一部修正した上で利用し、親子関係と適応感及び自立性との関係を検討している。その結果、親との距離の近さが、高い自立や近い将来への適応感に関連していることを示している。そして、堂野(2015b)では親子関係の心理的距離のパターンと自立及び将来への適応感との関連を検討し、心理的距離のパターンと自立及び将来への適応感が関連していることを示している。

友人関係との関係では、渡辺(2014)が検討している。大学生活への適応感を測定するためにこれまでの関連する尺度の中から、7領域(対人関係満足感、学習関係、大学生活への不安度、大学生活満足度、学校享受感・愛着感、居心地の良さ、抑うつ感)21項目を選定している。そして、因子分析の結果から、「大学生活に関する満足感」「大学生活に関する抑うつ感」「学

習に対する適応感」「対人関係の満足感」の4因子を見出している。そして、4年間の縦断的な友人関係との関連から検討し、入学当初の友人関係を新たな友人関係に形成し直した群の方が、適応感が高かったことを指摘している。

中村・松田（2013）では友人関係の良好さが大学への愛着に影響し、そして、学校不適応と関係していること、また、授業理解の困難さが学校不適応に影響していることを示している。そして、中村・松田（2015）では、GPAと出席率との関連を検討している。その結果、学校不適応感が出席率の低さに影響し、出席率がGPAの高さに影響することを示している。また、学生の性差による影響の違いも指摘されている。これは、友人関係、授業理解、学校不適応感、学業成績の関連を見たものといえる。

また、発達障害の特徴に関係する特性との関連を検討したものもある。内田・福本（2015）は「社会的場面で、個人の欲求や意思と現状認知との間でズレがおこった時に、内的基準・外的基準の必要性に応じて自己を主張するもしくは制御する能力（原田・吉澤・吉田，2008）」として定義される社会的自己制御と学校への適応感（自尊心及び被受容感・被拒絶感）との観点から検討している。その結果、社会的自己制御を高めるために被受容感を高め、被拒絶感を低める必要性が示唆されている。

また、横瀬・武田・境（2014）は衝動性と適応感及び意欲との関係について検討している。そして、衝動性の下位尺度である「注意性衝動」「運動性衝動」「無計画性衝動」と適応感及び意欲低下と関連していることを示している。また、衝動性の行動面について4つの課題を実施し、適応感及び意欲低下との関係についての検討もしている。

以上のように、大学生の適応については、古くから近年まで検討され続けているが、これは、適応がその時代の学生の特徴の変化と関係するものであるからである。したがって、近年の学生について不適応を検討することにより現代的な課題が明確になると思われる。

そこで、本研究では、男子大学生を対象に対人関係の困り感に関連する自閉症スペクトラム障害的困り感と適応感との関連について検討し、加えて、適応感に含められる対人関係に関連する自尊感情（内田・福本，2015）との関連も検討することにより、現代的な課題を考察することを目的とする。ここで、男子大学生についてのみ検討するのは、男女による対人関係の影響の仕方に違いがあること（中村・松田，2015）や発達障害の出現比率に男女差があること（上野，2003等）が指摘されていることによる。また、女子大学生だけを対象とした研究（堂野，2015a；2015b等）はこれまでもみられるが、男子大学生のみを対象とした研究は見られないからである。

2. 方法

(1) 調査対象者：448名から回答を得たうえで、女子大学生34名を除外し、欠損値の見られた回答者22名を除外した。男子大学生392名を有効回答者とし、分析対象とした。平均年齢は19.83歳（SD=1.01）であった。

(2) 調査期間：2014年7月から2015年12月までの期間に調査を実施した。

(3) 調査項目：①山本・高橋（2009）による自閉症スペクトラム障害的困り感尺度大学生版

(以下、AS困り感尺度)(25項目)を使用した。本尺度は、自閉症スペクトラムに関する既存の6つの質問紙を参考にし、大学入学直後の学生であっても回答可能であることと、自らの自閉症スペクトラム障害的特徴に自覚的でなくても回答できるという2点に留意して作成されたものであり、自閉症スペクトラムの診断ではなく、支援ニーズを把握するためのものである。各項目について困り感を「とても困っている」「困っている」「少し困っている」「困っていない」の4件法で回答を求めた。

②大久保(2005)の青年用適応感尺度(30項目)を使用した。「非常によくあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の5件法で回答を求めた。

③Rosenberg(1965)の日本語版自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)10項目を使用した。「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

(4)調査手続き: 集団形式により、調査用紙配布後、回答用紙に記入してもらい、記入後回収した。また、「回答結果は、集計して統計学的に分析し、研究に利用することがありますのでご了解ください。したがって、個人を問題にすることはありませんし、プライバシーの保護は守ります。」という注意事項を回答用紙に明記し、本調査の集計結果を研究成果として公表する旨、口頭でも説明を行い、承諾を得た。分析には、IBM SPSS Statistics Version 23を使用した。

3. 結果と考察

1) 各尺度の分析

AS困り感尺度は「とても困っている」3点、「困っている」2点、「少し困っている」1点、「困っていない」0点として得点化した。因子分析(主因子法、Promax回転)の結果をTABLE 1に示した。固有値が1以上で、解釈が可能であることから4因子を採用した。第1因子は「11. 進学やクラス替えのときに新しい友人を作るのは苦手だ。」「3. 初対面の人とはどうやって話したらいいかわからない。」「2. 雑談などのとりとめのない話をするのは苦手だ。」「1. 授業や行事で『グループになってください』といわれると困ってしまう。」等の8項目から構成され、「集団活動の困難さ」因子と命名した。第2因子は、「5. 皮肉や冗談がわからないことがある。」「21. うそや作り話を見抜くのは苦手だ。」「15. 他の人がどんなことを考えているのかを想像することが苦手だ。」「25. 暗黙のルールがわからなくて困ることがある。」等の7項目から構成され、「想像力の困難さ」因子と命名した。第3因子は、「8. 友達がなくて寂しい。」「13. 友達が少ないことが気になっている。」「19. 孤立していると感じている。」「17. 『自分は普通の人と違う』と感じて困っている。」の4項目から構成され、「友人関係の困難さ」因子とした。第4因子は、「16. 突然予定が変更されると混乱してしまう。」「22. とても嫌いな特定の音や匂いや肌ざわりなどがあって、困ることがある。」「9. 生活のリズムが乱されるのは苦痛だ。」「23. 行動が止って固まってしまう、困ることがある。」の6項目から構成され、「感覚面の困難さ」因子と命名した。

TABLE 1 AS困り感尺度の因子分析結果

No.	項目内容	因子負荷量				共通性
		F 1	F 2	F 3	F 4	
11	進学やクラス替えのときに新しい友人を作るのは苦手だ。	.77	-.03	.06	-.02	.61
3	初対面の人とはどうやって話したらいいかわからない。	.76	.07	-.21	.02	.51
2	雑談などのとりとめのない話をするのは苦手だ。	.70	.07	.03	-.06	.52
1	授業や行事で「グループになってください」といわれると困ってしまう。	.67	-.19	.19	.03	.48
12	グループ活動では居ごちが悪くて困る。	.64	.04	.11	-.02	.52
24	他の人たちのように、うまく会話ができない。	.56	.15	.06	.12	.63
18	進学やクラス替えなどで周りの状況が変わるときに恐怖を感じる。	.51	.02	.07	.22	.53
20	人と話しているときに、自分がいつ話せばいいかわからず困ってしまう。	.48	.33	.01	.02	.58
5	皮肉や冗談がわからないことがある。	.04	.92	-.01	-.33	.51
21	うそや作り話を見抜くのは苦手だ。	.03	.72	-.12	-.07	.39
15	他の人がどんなことを考えているのかを想像することが苦手だ。	.03	.71	.00	-.07	.46
25	暗黙のルールがわからなくて困ることがある。	.07	.56	-.02	.21	.58
4	場違いなことをしてしまって困ることがある。	.05	.53	.02	.12	.45
10	他の人たちからは自分は場違いなことばかりしていると見られていると思う。	-.03	.43	.21	.11	.44
14	過去の経験が現在おこっていることのようによみがあり、気持ちが不安定になることがある。	-.16	.31	.28	.24	.40
8	友達がいなくて寂しい。	.06	-.04	.91	-.12	.72
13	友達が少ないことが気になっている。	.19	-.15	.83	-.11	.63
19	孤立していると感じている。	.06	.16	.57	.03	.58
17	「自分は普通の人と違う」と感じて困っている。	-.10	.26	.44	.09	.41
16	突然予定が変更されると混乱してしまう。	.03	-.09	-.13	.73	.37
22	とても嫌いな特定の音や匂いや肌ざわりなどがあって、困ることがある。	.02	-.05	-.12	.61	.27
9	生活のリズムが乱されるのは苦痛だ。	.10	-.29	.08	.58	.25
23	行動が止って固まってしまう、困ることがある。	.13	.20	-.06	.49	.50
7	気分の波が激しくて、困っている。	-.28	.18	.30	.42	.42
6	次に何をするのかという具体的な指示が事前にないと困ってしまう。	.13	.23	-.01	.33	.37
因子間相関		F 1	F 2	F 3	F 4	
F 1	集団活動の困難さ	—				
F 2	想像力の困難さ	.63	—			
F 3	友人関係の困難さ	.60	.65	—		
F 4	感覚面の困難さ	.58	.76	.62	—	

尺度の信頼性を求めたところ、Cronbachの α 係数は、第1因子が.898、第2因子が.841、第3因子が.826、第4因子が.731であった。第4因子の値は高いとはいえないが、一応の信頼性が保証された。

各因子を構成する項目の合計得点をその因子の得点とした。各因子の平均値（SD）は「集団活動の困難さ」因子が8.64（6.70）、「想像力の困難さ」因子が7.07（5.25）、「友人関係の困難さ」因子が2.66（3.10）、「感覚面の困難さ」因子が7.58（4.23）であった。

青年用適応感尺度は5段階で測定し、「非常によくあてはまる」の5点から「全くあてはまらない」までの1点として得点化した。本尺度は大久保（2005）で作成され、主因子法でPromax回転で因子分析が行われ、「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」「劣等感の無さ」の4つの因子から構成されていることが示されている。本研究では、大久保（2005）と同じ因子分析（主因子法、Promax回転）を行い、同じく4因子と、固有値1以上の5因子で比較した結果、各項目の因子負荷量と4因子による解釈が困難であったため、5因子を採用した。その結果をTABLE 2に示した。

TABLE 2 青年用適応感尺度の因子分析結果

No.	項目内容	F 1	因 子 負 荷 量 F 2	F 3	F 4	F 5	共通性
5	周囲となじめている	.94	.01	-.20	.12	.04	.76
1	周囲に溶け込めている	.87	.01	-.12	.12	.01	.70
17	自分と周りがかみ合っている。	.70	-.01	.07	-.08	.05	.54
13	自由に話せる雰囲気である	.58	-.02	.09	-.03	.06	.39
9	周りの人と楽しい時間を共有している	.56	.17	.13	-.05	-.14	.53
30	周りと助け合っている	.47	.20	.21	-.12	.02	.53
25	周りに共感できる	.46	.12	.20	-.04	-.22	.44
11	周りから必要とされていると感じる	.03	.81	-.03	-.01	.04	.66
15	周りから関心をもたれている	.03	.74	.06	-.12	.00	.55
3	周りから頼られていると感じる	.16	.73	-.15	.04	-.01	.59
7	周りから期待されている	-.01	.72	-.12	.12	-.11	.49
19	存在を気にかけてられている	.07	.58	.12	-.09	.00	.44
23	良い評価がされていると感じる	.06	.42	.13	.12	.04	.38
27	リラックスできる	-.05	-.13	.84	-.03	.02	.57
29	安心する	.06	.17	.71	-.09	-.02	.66
28	幸せである	.06	.09	.71	-.02	.02	.62
22	充実している	.05	.03	.61	.23	-.01	.59
21	ありのままの自分を出せている	.14	-.07	.48	-.01	.11	.33
26	熱中できるものがある	-.10	-.09	.48	.21	-.03	.24
14	好きなことができる	.06	-.05	.38	.27	.03	.31
2	将来役に立つことが学べる	.17	-.13	-.01	.79	-.06	.57
6	これからの自分のためになることができる	.04	-.04	.01	.77	.00	.58
18	成長できると感じる	-.17	.25	.18	.50	.09	.53
10	やるべき目的がある	-.16	.19	.12	.47	-.04	.35
12	役に立っていないと感じる #	-.03	.34	-.13	.02	.65	.56
8	自分だけだめだと感じる #	-.15	.13	.00	.07	.60	.41
4	周りに迷惑をかけていると感じる #	-.14	-.03	-.07	-.02	.58	.33
16	嫌われていると感じる #	.18	-.08	.04	-.05	.56	.35
20	周りから指示や命令をされているように感じる #	-.06	-.19	.22	-.08	.41	.21
24	自分が場違いだと感じる #	.29	-.19	.13	-.01	.53	.40
因子間相関		F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	
	F 1 周囲との関係の良さ	—					
	F 2 被信頼・受容感	.57	—				
	F 3 安心・充実感	.58	.52	—			
	F 4 将来への展望	.19	.44	.36	—		
	F 5 劣等感の無さ	.12	.22	.27	.27	—	

注) #のついている項目は逆転項目を示している。

第2因子と第5因子は大久保（2005）と同じ項目で構成され、それぞれ「被信頼・受容感」「劣等感の無さ」の因子とした。第1因子は「5. 周囲となじめている」「1. 周囲に溶け込んでいる」「17. 自分と周りがかみ合っている。」「9. 周りの人と楽しい時間を共有している」などの7項目から構成され、「周囲との関係の良さ」因子と命名した。第3因子は、「27. リラックスできる」「28. 幸せである」「29. 安心する」「22. 充実している」などの7項目から構成され、「安心・充実感」因子と命名した。第4因子は、「2. 将来役に立つことが学べる」「6. これからの自分のためになることができる」「10. やるべき目的がある」「18. 成長できると感じる」の4項目から構成され、「将来への展望」因子と命名した。

本研究では、男子大学生のみを対象に因子分析を行っている。大久保（2005）では中学生、高校生、大学生の男女を対象に分析を行っており、この結果、因子の構成に違いが見られたと思われる。

尺度の信頼性を求めたところ、Cronbachの α 係数は、第1因子が.881、第2因子が.853、第3因子が.837、第4因子が.771、第5因子が.723であった。第4因子と第5因子の値は高いとはいえないが、一応の信頼性が保証された。

因子を構成する項目の合計得点を各因子の得点とした。各因子の平均値（SD）は、「周囲との関係の良さ」因子は24.76（5.68）「被信頼・受容感」因子は、16.30（4.32）、「安心・充実感」因子は、24.98（5.45）、「将来への展望」因子は、4.15（3.16）、「劣等感の無さ」因子は、19.94（4.44）であった。自尊感情尺度は5段階で測定し、「あてはまる」の5点から「あてはまらない」までの1点として得点化し、合計得点をその得点とした。合計得点の平均値（SD）は28.25（6.15）であった。

2) AS困り感と適応感、自尊感情との関連

AS困り感尺度の4つの因子と適応感尺度の5つの因子及び自尊感情尺度の間で相関係数を算出した。その結果をTABLE 3に示した。

TABLE 3 AS困り感尺度と適応感及び自尊感情との相関係数

	周囲との 関係の良さ	被信頼・ 受容感	安心・充実感	将来への展望	劣等感の無さ	自尊感情
集団活動の困難さ	-.395**	-.335**	-.347**	-.192**	-.372**	-.327**
想像力の困難さ	-.239**	-.248**	-.307**	-.134**	-.507**	-.424**
友人関係の困難さ	-.336**	-.228**	-.348**	-.203**	-.442**	-.341**
感覚面の困難さ	-.162**	-.181**	-.185**	-.096	-.366**	-.341**

** $p < .01$

最初に、AS困り感尺度の「集団活動の困難さ」因子について検討する。青年用適応感尺度の5つの因子及び自尊感情との間ですべて有意な負の相関が見られた（すべて $p < .01$ ）。「将来への展望」因子とは $r = -.192$ の弱い相関しか見られなかったが、それ以外では、「周囲との関係の良さ」因子とは $r = -.395$ 、「被信頼・受容感」因子とは $r = -.335$ 、「安心・充実感」因子とは $r = -.347$ 、「劣等感の無さ」因子とは $r = -.372$ 、自尊感情とは $r = -.327$ で中程度の負の相

関がみられた。

集団活動は演習の授業における討論、クラブ活動、就職活動などで問題となる。また、大学では高等学校までと異なり、クラス単位での行動が減少し、基本的に教室や教室内の座席も固定されない。高等学校までと異なる集団行動をすることが必要となる。したがって、集団活動の困難さは、将来への展望との関連が低く、その他の現在感じている適応感と関連が強かったと思われる。

次に、AS困り感尺度の「想像力の困難さ」因子について検討する。青年用適応感尺度の5つの因子及び自尊感情との間ですべて有意な負の相関が見られた（すべて $p<.01$ ）。しかしながら、「劣等感の無さ」因子とは $r = -.507$ 、自尊感情とは $r = -.424$ で高い負の相関が見られ、「安心・充実感」因子とは $r = -.307$ の中程度の負の相関が見られたが、他の因子とは $-.134$ から $-.248$ までの弱い相関しか見られなかった。

「想像力の困難さ」は特定の友人関係の形成・維持に関係する特性である。相手の気持ちを理解しにくいことで、クラス内やクラブ活動内で特に問題となる。また、教職員との関係でも問題となる。相手の話の意図がわからないことにより、対人関係において失敗をする経験を積み重ねることで劣等感を持つことになり、自尊感情も低くなると思われる。

第三に、AS困り感尺度の「友人関係の困難さ」因子について検討する。青年用適応感尺度の5つの因子及び自尊感情との間ですべて有意な負の相関が見られた（すべて $p<.01$ ）。「将来への展望」因子とは $r = -.203$ 、「被信頼・受容感」因子とは $r = -.228$ であり、弱い相関しか見られなかったが、それ以外では、「周囲との関係の良さ」因子とは $r = -.336$ 、「安心・充実感」因子とは $r = -.348$ 、自尊感情とは $r = -.341$ で中程度の負の相関がみられ、「劣等感の無さ」因子とは $r = -.442$ で高い負の相関が見られた。

「友人関係の困難さ」は特定の友人の有無や寂しさ、孤立感に関わる内容である。そのため、大学生活を送る上で、周囲との関係の良さに加えて、安心感や充実感、劣等感の無さ、自尊感情と関連が見られたと思われる。これまでの研究でも友人関係が大学生活への適応感と関連していることは指摘されている（中村・松田, 2013; 2015; 渡辺, 2014等）。困難さを感じた場合、助け合える友人の存在は物理的にも精神的にも適応する上で大きな影響を与えていると思われる。

最後に、AS困り感尺度の「感覚面の困難さ」因子について検討する。「将来への展望」因子では有意な相関は見られず、それ以外では有意差が見られた（すべて $p<.01$ ）。「劣等感の無さ」因子とは $r = -.366$ 、自尊感情とは $r = -.341$ で中程度の負の相関が見られた。しかしながら、それ以外の3因子では $r = -.162$ から $r = -.185$ までの弱い負の相関しか見られなかった。感覚面の困り感は、適応感や自尊感情とあまり関連がなかった。感覚面の困難さは学習場面や学習方法において困り感を感じる事が考えられる。また、感覚面は個人差も大きく、特異的な感覚は周囲との環境とは関係のない困難さである（山口, 2016）。したがって、感覚面の困難さが環境との関係が深い適応感と低い関連しか見られなかった可能性がある。

以上のように、男子大学生のAS的な対人関係に関する困り感に対して、将来への展望はあまり関連がないことが示された。一方で、「居心地の良さの感覚」、「被信頼・受容感」、「劣等

感の無さ」、自尊感情との関連が示された。

4. まとめ

男子大学生を対象に自閉症スペクトラム障害的な困り感と適応感、自尊感情との関連について検討した。女子大学生の場合、女子大学を中心とした検討がこれまでなされているが、男子大学生を対象とした検討はない。自閉症スペクトラム障害的な困り感は発達障害の出現率に性差があることが指摘されているように、男子大学生においてより困難さを感じる要因であると予測される。そして、その後の支援においては女子大学生への支援と男子大学生への支援の違いへと関連する問題である。

また、不適応に関連する大学生に特徴的な概念として、過剰適応が指摘されている（竹端・佐瀬, 2015）。後藤・伊田（2013）は過剰適応について、これまでの研究を概観し「外的適応の過剰さ」と「内的適応の低下」という2側面からの定義や、いわゆる「よい子」と過剰適応している子どもと同義語で扱っている研究を紹介している。そして、過剰適応尺度と居場所感尺度との関連を検討し、その結果、学校での居場所感を高めることによって過剰適応の自己抑制や自己不全感を軽減できる可能性を示唆している。

また、諸井・坂上・野島・岡本（2015）は、過剰適応傾向及び居場所感が自尊心と抑うつ感という精神的傾向と関係するかを、女子大学生を対象に検討している。その結果、過剰適応傾向が居場所感覚に影響する強い関係は見出されなかったが、過剰適応の2つの側面の機能の違いや大学生活の時期の問題の影響を指摘している。

したがって、大学生活に適応しているように見えても、過剰に外的に適応することで、内的に不適応を起こしている可能性もあり、大学生の不適応をQOL、うつ、ストレス・コーピングの観点から検討している研究（山口・松嵩・市川・長谷川, 2014等）からの検討も今後必要であると思われる。

大学生活への適応の問題は、これまで無気力やアパシーの観点（笠原, 2002等）から検討されてきたが、その時代の学生の特徴が大きな影響を与える。近年では大学生の「生徒化」（新立, 2010等）も指摘されている。

現在の学生の特徴を理解しつつ、大学生活への適応を高めるためには学内での人間関係を構築し、その中で自尊感情や他者との信頼感を高め、大学における居心地の良さを高める必要がある。自閉症スペクトラム障害的な困り感は、個人と環境との間で問題となるものである。人間関係を構築する上で、自閉症スペクトラム障害的な特性を把握したうえで、初年次教育等の授業において1年生時から支援することも今後必要であると思われる。本研究は男子大学生においてのみ検討したが、学部・学科の特徴も考えられる。学外実習を伴う学部・学科の場合、自閉症スペクトラム障害的な困り感は非常に大きな学業への影響を伴う。学生を取り巻く環境の要因を分析した上で大学生活への適応について検討することが今後必要であり、いわゆる、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（いわゆる、「障害者差別解消法」、2013年制定、2016年施行）により求められる合理的配慮の提供とも関連させて検討される必要があると思われる。

〔付記〕

本研究は、日本発達心理学会第26回大会（2015年3月20日、於：東京大学）において報告した原稿に加筆・修正したものである。

〔引用文献〕

- 新立慶 2010 「大学生の『生徒化』論における批判的考察」 教育論叢（名古屋大学大学院） 53, 67-75.
- 堂野恵子 2015a 「女子大学生の自立と将来適応感に母親及び父親との心理的距離が与える効果」 安田女子大学紀要 43, 57-65.
- 堂野恵子 2015b 「女子大学生の自立と将来適応感に母親及び父親との心理的距離が与える効果(2)－距離の『組み合わせ』による両親への全体的心理的距離からの分析－」 安田女子大学紀要 44, 63-72.
- 後藤明梨・伊田勝憲 2013 「大学生における過剰適応と居場所感の関連」 釧路論集:北海道教育大学釧路分校研究報告 45, 9-16.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田 俊和 2008 「社会的自己制御（Social Self-Regulation）尺度の作成：妥当性の検討および行動抑制／行動接近システム・実行注意制御との関連」 パーソナリティ研究 17, 1, 82-94
- 岩渕未紗・高橋知音 2011 「大学生のADHD困り感質問紙の作成」 信州心理臨床紀要 10, 13-24.
- 笠原嘉 2002 「アパシー・シンドローム」 岩波書店.
- 楠本久美子・八木成和・広瀬香織 2010 「大学・短期大学における発達障害及びその疑いのある学生への支援の現状と課題」 四天王寺大学紀要人文社会学部・教育学部・経営学部 49, 447-460.
- 諸井克英・坂上舞・野島彩・岡本有美子 2015 「女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索－過剰適応傾向, 抑うつ傾向, および自尊心との関連－」 総合文化研究所紀要（同志社女子大学総合文化研究所） 32, 71-83.
- 中村真・松田英子 2013 「大学生の学校適応に影響する要因の検討：大学不適応, 大学満足, 就学意欲に着目して」 江戸川大学紀要 23, 151-160.
- 中村真・松田英子 2015 「大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響(2)－出席率, GPAを用いた分析－」 江戸川大学紀要 25, 135-144.
- 大久保智生 2005 「青年の学校への適応感とその規定要因－青年用適応感尺度の作成と学校別の検討－」 教育心理学研究 53, 3, 307-319.
- 大久保智生・青柳肇 2005 「大学新入生の適応に関する研究－社会的スキルは後の適応を予測するのか?－」 人間科学研究 18, 2, 207-213.
- 大久保智生・加藤弘通 2005 「青年期における個人・環境の適合の良さ仮説の検証－学校環境における心理的欲求と適応感との関連－」 教育心理学研究 53, 3, 368-380.
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton Univ. Press.
- 竹端佑介・佐瀬竜一 2015 「大学生の不適応について－不適応状態の判断と過剰適応の視点から－」 国際研究論叢（大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部紀要） 28, 3, 65-71.
- 内田利広・福本絃未 2015 「大学生の社会的自己制御と適応感の関連－自尊心と被受容感における特徴から－」 京都教育大学紀要 127, 119-131.
- 上野一彦 2003 「LDとADHD」 講談社.
- 渡辺舞 2014 「大学生の友人関係は変化するのか?－大学4年間の追跡的検討による大学適応感との関連について－」 北星学園大学大学院論集 5, 67-81.
- 八木成和・広瀬香織・楠本久美子 2011 「大学における学生自立支援の方向性－発達障害及びその疑いのある学生への支援との関連から－」 四天王寺大学紀要人文社会学部・教育学部・経営学部 51,

411-419.

- 八木成和・楠本久美子・広瀬香織・川下維信 2012 「発達障害及びその疑いのある大学生の支援プログラムの開発」 課題番号(21531038) 平成21～23年度科学研究費補助金基盤研究(C) 研究成果報告書.
- 山口真美 2016 「発達障害の素顔」 講談社.
- 山口豊一・松崎くみ子・市川 麗・長谷川恵 2014 「大学生の学校不適応に関する研究－大学生版QOL 尺度の作成を中心として－」 跡見学園女子大学文学部紀要 49, 137-147.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 「認知された自己の諸側面の構造」 教育心理学研究 30, 64-68.
- 山本奈都実・高橋 知音 2009 「自閉症スペクトラム障害と同様の行動傾向を持つと考えられる大学生の支援ニーズ把握の質問紙の開発」 信州心理臨床紀要 8, 35-45.
- 横瀬洋輔・武田知也・境泉洋 2014 「大学生における遂行機能と衝動性および適応・意欲の関連」 徳島大学人間科学研究 22, 79-98.

